

二〇二二年一月二日

寒暁に白寿の媼大往生
鴉二羽組んず解れつ枯木立
火球過ぎ何事もなき冬銀河
阿羅漢の肩押しやまず神渡し
縁に座し小春日和を充電す
着ぶくれの妹背モールで分かれけり
みかん剥く独居の部屋に香りけり

千鶴
むべ
素秀
素秀
董雨
あひる
みきお

二〇二二年一月二日

縁石にリュックの並ぶ落葉道
鎌翳し武蔵然たる枯蠅螂
北風に諍ひぞめく神の楠
海底に日の斑の揺らぐ小春かな
散歩道今日はここまで日の短
干せば雨入れれば晴るる冬の空
ガレージに簾のごとく大根干す
今日もまた同じ草叢残る虫

なつき
凡士
素秀
もとこ
菜々
満天
こすもす
むべ

二〇二二年一月一日

身にしむや地震に折れたる一断碑
白雲の流るる川面照紅葉
黒雲を射抜きて釣瓶落としの日
悪態を一つ覚えて七五三
うしろから追ひ抜かれたる落葉道
寺紅葉貫主と記念写真撮る
濡れて着く喪中のはがき初時雨
革ジャンが社務所に消えて緋袴に
石路咲きて色なき庭の華やぎぬ

ぼんこ
満天
はく子
素秀
みきお
こすもす
せいじ
凡士
ぼんこ

二〇二二年一月九日

水平線大きく撓む小春かな
妻がゐる不調の我にホットレモン
紅白の小菊で市章菊花展

もとこ
せいじ
なつき

冬帽子鳥居の上へ願ひ石

音もなく庭木々濡らし時雨来る
紅葉谷またぐ吊り橋揺れ止まず
寝静まる茅葺きの里星流る
木の葉舞ふ緑青の屋根反りに反り
彩少し添へて墨絵や紅葉山
馬止の傾く宿場冬ざるる
実千両色付く庭の一隅に

明日香
満天
智恵子
みきお
明日香
凡士
たか子
董雨

二〇二二年一月八日

灯台へ螺旋階段天高し
朝の鴨思ひ思ひに陣なさず
辻裏の地蔵にほのと冬日差
座す膝へ紅葉舞ひ落つ浮見堂
秋さぶや解体を待つ大観音

もとこ
うつき
たか子
むべ
素秀

二〇二二年一月七日

達筆の御朱印もらふ神の留守
秋惜む岬から岬へ島めぐり
石畳駆けて枯葉の遊びをり
重なりし亀なだれ落つ池小春

宏虎
もとこ
明日香
あひる

二〇二二年一月六日

木犀の香に集ひきて立ち話
足つかぬ椅子で順待つ七五三
秋惜しむ如く旋回コウノトリ
冬隣勉強機の向きも変へ
角隠し渡る松廊菊日和
秋高く高炉の煙直立す
老いてなほ野球少年草紅葉

満天
なつき
こすもす
菜々
智恵子
やよい
かかし

毎日句会みゆる選・二〇二二年一月四日